

修行道場としての伝統を受け継ぐ

松溪山 智源寺を 訪ねて



寛永二年（一六二五年）、宮津城主京極高広が母堂、惣持院殿松溪智源大禪定尼への追善として建立した寺。開山は心庵盛悦禪師である。京極家の隆盛に伴い、寛文元年（一六六一）永平寺より僧録司の任を賜り、末寺九十一カ寺を抱えるまでの寺格となった。その後も丹後曹洞宗の束ね役を務め、修行道場としての伝統をいまなお受け継いでいる。

「紙本着色草花図」二十面 ●本堂の天井画。当時の京都画壇を代表する円山・四条派と土佐派の絵師20人が競作した傑作。京都府指定文化財



本堂 ●釈迦三尊を祀る。文化元年（1804年）の再建。宮津市内最大といわれる立派なお堂

京都府



かつては本堂の屋根に掲げられていた鬼瓦。京極家の家紋「平四目結」が見てとれる



丹後曹洞宗の僧録寺を務めた名刹

宮津市京街道沿いに臨む松溪山智源寺。宮津城主京極丹後守高広が、その母（毛利秀政の娘）惣持院殿松溪智源大禪定尼の菩提を弔うために建立した寺で、創建は寛永二年（一六二五年）五月。街道沿いの要所という地の利から、城下の防備の役割も兼ねたものと思われる。開山は、桂林寺十世・心庵盛悦禪師である。

時の隆盛を極めた京極家の繁栄に伴い、本寺もまた寛文元年（一六六一）には永平寺より僧録司に任せられるまでの寺格となった。末寺は九十一カ寺にも及んだという。その名残



取材にご協力いただいた皆さま。四十一世・高橋信善住職を中央に、近畿管区理事の天野祐至師（左）と基幹事業委員会委員の橋垣憲光師（右）

は、伽藍の各所に施された京極家の家紋「平四目結」からも窺い知れる。しかし、京極家の歴史は、息子高国に家督を譲ったあと高広が藩政に介入し続けたことから親子は対立する。さらには高国自身の悪政も災いし、寛文六年（一六六六年）お取り潰しとなった。その後、藩主は目まぐるしく代わるが、寺はその時どきの藩士や町人、檀家衆との関わりを深め、丹後曹洞宗の中心的存在であり続けることができたのである。藩主の菩提寺ではなかったことが、京極家改易後も寺が衰退することなく、名刹としての歴史を絶やさぬ道が歩めたと言えよう。

